

Tamanga Ran! Vol.6 2017.2.3

青年海外協力隊 マラウイ派遣 本田 藍

みなさんお久しぶりです、またまただいぶお久しぶりになってしまいました…。赴任から1年経った頃から、時間の流れがどんどん早くなり、気づくとこんなに経っていた！ということがしばしばです……。アフリカナイズされているのでしょうか。笑 早いのも残りの任期も後半年、というところまで来ました。今年のマラウイは11月末より雨季に入り、任地ムチンジではほぼ毎日のように雨が降っています。村人たちが大急ぎで植えたメイズや野菜の芽が少しずつ伸びてきて、今まで赤土一面だった台地が少しずつ緑の大地へと変わっていくのがとてもきれいです。



*マラウイ湖の夕日とプルメリア

◎ストライキと援助慣れ

昨年9月から始まった今年度の学校は、教員の1週間のストライキから始まりました。先生たちは学校には来ないので、授業はせずにひたすら座り込み（おしゃべり）、生徒たちは教室内で座って下校時間まで待たされている。私も同僚の先生に「授業しに来たの？今はストライキだからあなたも授業しちゃだめよ」と言われてしまい、活動ができませんでした。ストライキの理由は、大きく2つ。昇級した教員の給料が低賃金で払われ続けていたことと、前年度の小学校の卒業試験に試験官として参加した教員の日当が払われていなかったこと。他にも、昇級（＝昇給）のチャンスがほとんどないことや、お給料が安いことも教員たちの不満となり、今回のストライキにつながったようでした。ストライキはマラウイでは頻繁に起こるようで、先生たちも教育委員会も「いつものことよ」という感じでした。

ここで、私がこの1年半ここで生活して感じたマラウイの援助慣れの実態について少し。マラウイでは研修会やワークショップに参加すると、主催側のドナーやNGOから参加者に”日当”と”リフレッシュメント”（スナックやジュース）が用意されるのが一般的です。いつどのように始まった習慣なのか

詳しくはわかりませんが、よく言われているのは、“集客”のため。発展の成果は目に見えづらけれども、ドナー側は〇〇人に知識を共有しました、と数字の報告はしやすい。数字、確かにとっても大事だと思うんですけどね。現在ではこれが定着してしまい、残念ながらこれらが出ない研修には参加者がほとんど集まりません。ひどい時にはこれらがないと職員会議にすら参加しない先生もいます…。JICAは基本的には人的援助が中心なので、私が研修などを行っても、こういったお金は出せません。よって、現地教員に活動の話を持ちかけても、「あなたは私に何をくれるの？」と言われてしまい、活動の足かせになっています（もちろん一生懸命働いてくれる先生もいますが！）。知識を持っている人にお金を払ってサービスを提供してもらおう、これが先進国のスタンダード。それにここにいる外国人たちはみんなマラウイの発展のために必死になっているのに、あなたたちが頑張らなくてどうするの！！と、いつもモヤモヤしてしまいます。

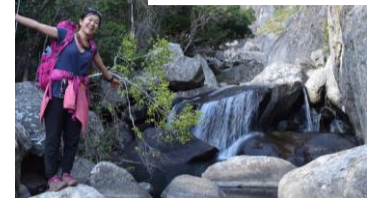
日本と比較すれば金銭的に貧しいのは確か。この日当に助けられて生活している人たちがいるのも事実。しかし、そのお金はある程度収入のある人たちに行き、村にいる本当の貧困層には届きづらい構造があるのも事実。また、お金が先にないと動けないのでは、このお金のない最貧国においては何も始められないし、負のループ。ドナーがお金を投資した分、その知識はマラウイにきちんと広まっているのか。援助って何なんだろう、何が本当に現地の人のためになるんだろう、答えはまだまだ見つかりません…。



*NYIKA 国立公園にて



*マラウイ南部の
ムランジェ山登山



◎今月の活動 ～合唱コンクール開催～

昨年 11 月 22 日に任地で合唱コンクールを開催しました。目的は大きく次の 3 つ。①情操教育における実技指導の重要性を理解してもらい授業内で促進すること、②マラウイの学校ではなかなか機会のない、継続的に練習することの大切さを感じてもらうこと、③少ない予算で学校行事ができることを知ってもらうことでした。マラウイには、日本のように合唱祭や学芸会といった学校行事がほとんどないため、教員には写真や動画を用いて“合唱コンクールとは”をいちから説明し、準備を始めました。ムチンジは子どもの数がとても多いので、なるべく多くの生徒に参加してほしいと思い、予選会(3校)→決勝戦、という計 4 回のコンクールを企画しました。



*オリジナルの劇付きの自由曲

先生たちと何度もミーティングをし、会場設営、参加する生徒(ムチンジの学校は 2000-4000 人規模なので、生徒全員が参加するのは難しい)、練習で気を付ける点、リフレッシュメント、景品等について何度も話し合いを重ね、時には揉めながら、最終的には何とか形にすることができました。

やはり大変だったのは、リフレッシュメントと景品について。私としては、生徒にはご褒美がなくても一生懸命やることを学んでほしかったし、予算も倍以上になってしまうので、リフレッシュメントはなしで行ってほしいといったものの、彼らは「これは私たちの文化だから」と言い、結局用意することになりました。景品も、私は日本の感覚で賞状だけを用意しようと考えていましたが、現地の人からは、コンクールをするのに何で賞状だけなんだ、お金や食べ物を用意すべきだ、と散々言われました。が、ここは譲りませんでした。

「後 10 分で着くよ」と言いながら 1 時間くらい遅れてくる先生がいたり、練習が間に合わないからと勝手にコンクー



*左：少し田舎の藁ぶき屋根の家。右：生活用の水くみは女性と子供の仕事



*合唱コンクール決勝戦の様子



ルの日程が延期されていたり、当日、開演時間になって、ようやくバナーを作ったり椅子を並べたりする先生がいたり、自由曲は 1 曲といったのに、当日 3 曲用意しているクラスがあったり、思うようにはいかない部分もハプニングも多くありましたが、この 1 年半でだいぶマラウイナイズされた分、いろいろな問題に柔軟に対応できた気がします。

驚いたのは、自由曲をオリジナルで作曲して、ダンスや劇までつけているクラスが多かったこと。本当にこっちの人たちは多才だなーと感心しました。また、このイベントを通して身に染みることが一つ。「郷に入りては郷に従え」。今回、私は合唱コンクールを企画・実施する中で、これは日本のものだし、ここはこう、あれはこうしたいとはじめいろんな意見を言いました。しかし準備を進める中で、彼らには彼らなりのイベントのやり方があって、私が思うすべてのものはこのやり方には合わないんだなと気づかされました。全然予定通りに進まないし、口ばかりの彼らだけど、黙って彼らに任せることも大切なんだと。バランスって難しいなーと。



*NYIKA 国立公園にて。右：一番大きくて強い Antelope

また、このイベントが実施できたのにはたくさんの隊員の助けがありました。日本人の何も言わなくてもわかって、察して動いてくれる素晴らしさ！本当に感謝でした。生徒たちの一生懸命で、楽しそうな顔を見られたので、大変でしたが本当にやってよかったなーと思いました^^

◎らんのつぶやき～私を日本に連れてって！発展とは？～

職場でも街でも、知り合いでもそうでなくても、いたるところで「私を日本と一緒に連れて行って」とよく言われます。基本的にはその会話が始めるとたいいの場合、とても長くなるので、ハイハイと流すことが多いのですが、たまに自分に余裕があるときには、深く話を聞くことにしています。

「なんで行きたいの？」と聞くと、単純に日本を見てみたい、日本はお金持ち＝自分もそこに行けばいい暮らしができる、日本でビジネスをしたい＝お金持ちになれる、と返ってきます。いろいろ世間話をする中で、私が日本人は毎日朝から晩まで1日12時間も13時間も働いてお金を稼いで、それでようやく今の暮らしをしている。生活費もここの10倍くらいかかるから、ここよりお給料がいい＝いい暮らしができる、ではないし、日本にだって貧しい人はたくさんいるよ。という話をする、「え、そんなに忙しいのか、家族や友達とおしゃべりしたりご飯を食べたりする時間がないじゃないか、それなら行かない」という人、「なんでそんなに長く働くんか」と聞き返されるのがほとんどです。

働いて、お金や地位を手に入れば今よりお金も時間も自由な暮らしができると考える日本人。お金は不自由だけど、家族と過ごす時間があって、日常の小さなことに幸せを見つけるのが上手なマラウイ人。発展して忙しくなったらきっと今の暮らしは少しずつ変化していく。発展って何だろう、本当にいいことなんだろうか、時々わからなくなります。